最上英雄録

五

内閣文庫
和書
類 [三]五七 號
五一 函
冊 八
架 九

内閣文庫
番號 和 16157
冊數 8 (5)
函號 151 78

国立公文書館
National Archives of Japan

最上英雄録巻五

英雄諸少年武芸
付 主計牛嵜と同地氣を察事

一時主計を小身より大名の家小臣しあれて。一家宿老の家となりしが。家中一同に尊敬を
うけつてもつこしられ春父駿河が厚恩なりして。
養父母に孝心をつくしけるある時諸士乃
側にありて酒宴をひらき打とけてうる物語
乃席に諸士ちとふるひけるに方事今万石
の家をた内しあくを諸士一同のうさひ小尊敬

せしる。まことに果報はうれしき事なりけり。その
うつりもいまだく足ざらせる頓ありや。ただ
むまつりごとが心と引てきまりければ
乃事には。去冬鴎鷺武術の一流の時取扱ひる
御家中の若年でもいづれも御用立べき者なれば。
志あるともがらは拙き藝術の面目にさまりて。
比類まれなる御めてたしみあづかりはべりしとも。
彼等は当時の御褒美のさみして今にいたりて
百おさうる事もなく。むねしくしつきしをうかる
世の聞へしと誠に外の事にあらん。志ある武

当家は組武形のもれでも中立べき事ならば。へでも
一向中あるまじきと考て人はさこころ。家君の
御聴明におりしましは。つゞがおりあやしかるを
忍入はりしこうてはが若年の者みなり。ただ
こうを私とねつきましくも不義なりともふくさ。
自分さへうつくしからば朋友の事とてもまもりて
義理もにてもまきまく志の共に後悔ゆへで
恥入てはあ。ねがわくは家君武勇のまもし引
義さしし。義仰まゐる若年でもとに面をうつ。
家格お通ふ百つりまもるすゞるましくが者ますう

有難き仕合なり。然るに一途当時は治世なれば永く
く拝つゞき申候者。いか様ふ御陰徳ふ拝受遣さるべく
おぼしめさるべく候へども江戸御屋敷よりて御入用
御同席方の御交接にはよろしく御出のよしにも
朝夕の御饌御衣服御手足より雑々の御厩入用
ふいたるまでも。自然と華美にしつらふまゝる事
も奢侈ふなりゆく世の風俗ふては。つゝに御常日の
御入用いつも引たらずさて御備手向の諸役人
さしつかへ。しかるべからざる事と困りてはお主人の
君案じらるゝことして。百姓ふ課役をうけ又

を御強達と重く仕つめでいらるゝにゆゑさまぐ年貢かさ
み御宥免なき事あるべし。百姓どもいとゞくるしみに困窮せるとも
らしむるわざにありて。上下の困窮かさなり御自分様
の御驕奢よりかゝるは又次の家君武事を御好
あそばさるゝもしゆしも武家ふ御生まれありしも然るべし。
中分もなる事結構なる義よつては。つまりも。たゞ過ぎ
一、廉格用格御平生の御ふるまひくさくしてまこし
ありとも御人格なく候はゞ。よりよく廉格用格
おいての時節とさぞかしぢきん下々みな節ずかり
仕つるべく御家中御一統の一命をもつて候はず。

こゝろしかゝる儀は御ざれば。聖人も好生の徳と申
ことあり。佛者のころ殺生といましめける事も。御政
むかしは去状湊宿御渡宿の節。海蛇のあらはれ
いでゝ君をなやましゝ節も。笠者山川を度々
御ありしあるまゝ。海類のことまで御ふしやれは
よしや上つる所はまつりての。一山獣もさまで年
年をいでゝまだ。ことをとふしやつさよしやうと
しらしたなりあそびまゝ来年に三年めなりし君よる
し御名とつりて御ひとか椋のすことつくしてける。
妖のくまようつく鼠るとかけ御名ようにつくしく

御難は。つゞ妖怪もしまはらかし出る義に。おゐる
まじくは。この三ヶ條の義もこれなし。申さるゝは
日よりやうて。胡蝶をかしく申は私の栄花を
ゆめゝ満足も仕しかれど君の御義心痛仕ゆか
つまりて辭舌さらにふりしかりけれども。渋実のうつなき
かきみは似合ぬ言論。我等が眼涙ふしかいゆるず
愚者なり。私の執心せられしあやりしかぐ。
主計も感涙ともがしし不肖のくるしき心頂
御あはれむこと遠御吹届あらんことを有がたさ
仕合ふかしまいりなりとて退出しけり。

養父駿河も後に今日譲りの次第をききて我等
も平生左様にこそありたくは候へども君聴明に
ましませば御前に出るも何となく口ごもりぬ。
恐入ぬるの志ありしかば汝が年に
て左様の義よく申上られ我等も及ばざる事と
おもはれしとて感心せられけり。其後日数へて去冬
鵜飼武術一流をひらきし諸生連いづれも当城
と命じ之内石小五郎とあるは小身なるをめし
いだし一門の列に加へる。和田小四郎河野主馬渡
辺左衛門遠藤左衛門鷲尾六郎黒沢龍之助浦辺

虎吉遠藤三吉松山猪之助清水東馬荒井
小次郎等也。いづれも三百石を給り近習頭に
申付ける。此外武術出精の少年ども二十余人。
いづれも馬廻り両番の中へめしくはへられたり。
これも主計が吹挙のよしいづれもきこえてよろこびて。
これによつて大に喜悦し主計殿の周旋ゆへに我々が申
合せて一命をなげうちてんとかや申合せけるとぞ。
同日主計が実父金森五郎七出精して若党奉公
し山林方も志ありしによりしかば此のうへ平生
学問軍学をもはげみけるよし褒美あり。勘定方

の頭役中付しまゐ。外ぐらはく近習書役用人抔など
まじへのがりけるま。これらの主計ハ落ゆくまゝま
嫉妬ある者もなし。目出度次第なりけりしよ
さておりつゞきめのなりし。人々大よろこびや
ありけり。抑奥州仙臺ゐゝめし。雪ハつもるこゝ
中ゝ東南西北ゐゐのかよふところふあらず。
まことに東北極限の地なれバ九十月のころ
より初雪ふりそめしまゝいかなや其山邑里と
一面皎々とふる景色日ごとにつもりて消る
ことなかりし。氷條ハ人家の軒より地まで

さ。寒風のはげしさゆゑにも似ず旅人ハ雪と日
うぢつさねく待もあるなりしりて。雪まゝまだ
鬘とも舟とさしこゝに拙具深引を
まかりし。勿論のハ雪とし人事ものにも似ず。
人家ハ東西小屋上ニ人の行のかゞせ昼夜中四更夜
づゝも雪とともしらせさまゞ。雪にて家のおしつぶ
さるゝもある者なりけるに當時の領主陸奥守
忠宗公ハこの廉将とこめくく雪の晴をまち
うかしに山やふいでく。廉将奮将せしめしと蓮
國のなくさゝにせしに。今年も二月末城より

二三里はなれたる所に。傷寒はやりしが。片時計も
隔なく側近く侍りける時に其方の往来ゆへ。病人
とゞめし時村をつゞきに百姓人牛を引てゆきしや
御成をまちしかど。待くたびれてかへる時疫
にかゝりけれど。三計目と付られ。牛はいてあつげ
に。吐く口端よる様子涎垂ある。其の牛は六歳
里と引来りしや。ほどなく。百姓中にいまだ
三里程と引つれし牛あるに。例に時疫きたる人。
三四月頃までは雪もつもる事もなくすみやかなりし
けれど。二四里と引牛はうけうり熱とくるしむ

なし。今年いまだ二月のはじめなるが。様に熱がつよきは一時
地氣の例よりは暖かなるゆへなるべし。人間にはいまだ
もさる事と。畜類はうつりてよく病じは老に
まさりて。問はぬ事までうつりけるに。
下素はなりしは多く雑人にこそいはれしけれ。其計を
左様の事もあるべし中にてあやしび付などする
いふなりけるが。今日は高しと数もなく聞し。
狩山なぞかゝりいつしんに。不正たる先に見る
けるに。其計ありしものしかる年は地氣例より和暖
にあらしては。山中には雪もつもらぬもやあるべし。

まかりて今日ハ引返しけるにつけて諫けるの者ありて常にか
らだ憤りもあるべけれど籠居の中ハ心もやうやく
納りして帰城ありけるが常住此山中にて雪多
く降り積りて旅人二三人もまでうちころされけり
と注進ありけれど町奉行ハいかで地中の氣にて迄
そのうちやうく見えつらしりん人間にハよもあらじ
と家中詮判しけるところに雪ふりしことハ東山の麓ふ
も常にある事にて地氣いつのけしよう温暖なる
るに降つもりて日数ふる高根の雪上迄に常より
かわらずありながらし一寸ハ下らしくて留くもりけりま
ましし雪のぐさに落てくるなり。されて地に積
るものハ皆打殺さる事となりて。其計百
姓小屋の端にて雪の溶るまじきもあるべしとて
心付しけれど心よくしたる若者ハこらえあれ
けるの

涌津猿山妖怪發端

付江戸飛脚注進の事

此年四月も例年の参勤年なりしか將
海東忠宗より江戸へ参勤御目見献上の品
例より少なかりし事なく首尾よく相済ける。

府県ヲ併して江戸屋敷あり仙台の
城中には宿老府県駿河并国老名目を呈城
しに万事ぬけ目なく我志まりとなし其政正
しくおこなひけれバ国境よく安く治けりここに
城より十四五里をさりて浦津といへる所あり。
この所に猿山といへるあり。ここは志賀が嶽といひ
つる高山よりつゞきて十里がほど嶮嶺絢霞
おびたゞしく深林喬木高く樹生しげりて古
より猛獣多くすみけれバ猟師の手にも
叶ひがたしこゝに又近きの猟師七郎兵衛

とて猛勇不敵のあらき者ありしが彼猿山へ行
おそろしく他の猟師はいかばかりかぞ何程のこと
あらんと十文の鉄炮をうちかたげ入しが猟よりも
日暮にいたるまで一鹿一猿をもあらざりしかば大に
退屈してある松陰の大石に腰をかけて烟草を
のみてゐたりけるがなにとなく谷底より竹木
の中より出来る人のけはいのしければ
こゝにおそれあるべし此山の奥にはあり
猿の年へたるか又は山男様の者が年生し人の
来りなんと思ひ入しとかさしりて。

彼を殺害せんとて、かまへしなりけんと心付て。
鉄炮へ強薬を仕かけ待うけしや。皆との
がりし追善とこそいへ。大入道熱病にて毛生
えかゝり末の白の蟲とも見えしが。両眼今まで
にらみかへしやうに七郎が霊と一さまおよせん程
あまりて来る大僧の七郎が霊事なせど。
二度迄ほとんど打鉄炮あらはれしが。
入道はなふさもせず。猶も例のごとく来る
事二度ありけるにつけても七郎が霊今もかくるまゝ
まくる事をねんせん方なくてはふおし

鉄炮をもつて一打にせんとやと打てける。入道
其に鉄炮を引うけんとて。入道のかま
こふにおよぶへしけるが。七郎が霊平日信ぜ
し村の鎮守八幡宮をひとへに念じけるその時
入道は跡もなくなる口と大きにひゞき
汝が領主常に田猟をこのみ殺生をおほし
大海をとしごとに海のうへにつうて湊の
宿まで大ちからにやまとし家来がこぞりて山中
の住居三年以前より一統に合せてまで
小今年まちの皆ちをとりつゞく領内と騒動

させ我等が孫子の代と報ぜんと。みなし村は
くつて代官所に注進せしは汝がまゝにてその時
乃案内に来るべきよしかたく申付けれど
し明日よりも二丈この山中へいりしが一さきにゆき
べしとおもひて一族の猿風とともに洞穴とみえ
けれど流石大猿の七尺ばかりの毛いよ〳〵ちゞて。
おそろしく思ひしがさきの村へくだり。庄屋
の宅にいりてつげしかば。代官所へもはや
たりけるに。いづれも奇異へぞ猿の変化なるべしと
評判ありし。されば近国へ日夜ともにきこえ入ての

猿なる者。みな〳〵大なる猿どもは。いづれも人を恐
もなく人家の老人小児などを引さらひて血
をすひ又は婦人小児といへども殺すに稀々
なりしかば。又は村々につゝしみて合掌
ごとく田畠とあらしけれども一揆中
大江山酒呑童子もかくやありけんといひつゝこ
そしりけるも。みな山々の村々は家毎に門戸
を閉肩輪とぢこめ往来をとゞめて用心せり。
かくて日数のたちしのち内に猟師などにたのみ
あはせけるに。みな山はまださがしあてずかくしまされば。

代官所よりも捕吏をさしむけしかどもかへつて
引きも切られ殺傷せしかばさしもにまさ
まる容子なりしかば一門の速水安藝の領
地なれば速水も聞きつけまづ家中にあ
らゆる目付一人鉄炮組足軽五十人をすぐり
こいつ捕へさせんとても元来畜類のことなれば
何ほどの事かあらんとつゞいて山辺へしかけさせて
鉄炮をうちかけつゞけ打つる烟の中を事ともせず
目付組頭二人引裂いづくともなく逃失
ければ鉄炮足軽五十人この容子を見てことごとく

たまらず周章狼狽して一同に逃げかへれ
ば山中なりしにたちまち震動して何かはしらず
たまるべきやうの内に眞黒なる小山のごとき者来り
ておそひかゝりて引さらはれしは二百人とかや命を
たすかり帰城したるはわづかなりければ安藝守
もたゞならぬ変化にもせよ猛獣にもせよ家領内に
ありながら人民を害し討手を殺害に及ぶは
にくき仕業なりければ此度は自身さしむかひて
なりと討るべしと城中の士卒二千人足軽中間
歩卒までもとりあつめられしかば五千人ぞあり

にて打むかひしはじめ近代の領主へわたりましけるぞ。
家君備前守の事なりけるが、かくして持主ぞかはり
あらゆる一門の面々も右加勢として人数とさ
しむけられしに、領分ゝへ毎ある乃人数とみえたり。
安藝も使者を以てしばし城へつゞきてはうける。
宿老片岡駿河眉といひしが、これ三年の中に御領
内に怪獣の変ありしその時妖賊これと出でけり。
去年凶宿の変ありし時筮者ちか申上る
ようもしられまさに此事あるべし。これが中く
安藝の一手をもつて治るべからず。が城乃騒動り

あるべし。かゝる人民同士の戦なりけるが、たとひ何万
騎の敵ふしけるとも此仙臺の城まで立こもりて
いかでか人民の強引せんに於ては、関八州の
軍勢が一時におしよせ来りても更にうれひはすまじ
たゞおそるゝとはいへども今度の畜生變化の
ように妖賊の人にうつりまして一向先の様子がしれまさず。
先なる用意とてのへ堅固にさして諸組
諸大名へ申して陣立となし、又各郷を
て江戸屋敷へ注進し折をつけて八月
十五夜の野分もなし最上一粟橋の古戦場

水増り日数をつゐえ御帰陣せしめ給ふべき
き時刻とうつし九月朔日江戸の屋敷へ注進あ
りければ。然れども。あまりの変事なりければ。公儀への
御届もいかゞなりと。同苗御年寄衆へ内々評議ありければ。
いづれも当年はとやかくの申しあへて評定
と御吟味ありて吟味中付らるべし。来年にいたり
めるまでの吟味出来ませば帰府の後又々吟味
しておつゐて注進申上らるべしと御年寄衆ゟは
沙汰ありしが伊達家は一統評儀して家中の
[illegible]

人の外は上下ともに引しけ大きに心痛しけるとぞ。
安芸が家中のものは安芸もりとこもりゐたるに
あまりの人数を引連山を出して我涼ところ屋敷を
さして待うけのごとき事四五日に及び何事
もなかりけるが。安芸が勢は大に退居して山中へ攻入
るといふ。安芸は政宗以来東西の合戦に老練の
ものなれば。あつく制して禁じいづれも逸雄の若
者どもゝさすがに山入なく二三百人山にかくれ入けり。
もとより山風もはげしく吹荒て数多の大猿
大入道いくらともなくけはふりていづくともなくかの

血氣の若者共ハ我も／＼と鉄炮の筒先を揃へて
打立けれバ流石の大猿二三十疋と討る猿ども
ハ手負て一ッへ二三疋づゝ或ハ四五疋づゝ組付かへ兼
見てまきしけりて伺こそせん方なくなげきいのちの
何とかも取らる手負人にとりつきやうやく血をとゞめ
しけれバ手負ども山下へしきりうける安藝とのより
とやさかれどもこらへ汝等血氣にはやりて殺傷を
なさしめ明日ハ早朝より山中へ押入家来どもにかけて
退治すべしとて六月八日の早天に鉄炮組を先
にたてゝ鷲津とよぶ者して陰組にまゐらする山

猿どもしのびける猛獣の変化どもなりしかバねて人氣
絶さらりたらせんとして数多の兎入道数
万の大猿小猿ともにしきりに叢林に月にあまる
うつくしき並居るもなつきし大都と共にかくのごとく
じて山川震動せり安藝ハこゞりして居るところ
大都ともして鬼神なりとも変化なりとも領
ま安藝が退治ハむつかしからずとやかく合戦ハし
つかざる以前小隊条せよたちまちづゝ首切てこの
山中の草木寸ましるまでも残らず焼
亡さんとてさして下知を傳へけれバ鉄炮

組数千挺の筒先をそろへてまちかくる是又入道に
鉄炮はもつはら也遠しきわして数百の猿
を引つれし安藝に前備をさせて立し鉄炮組
の足軽二三十人とわけけるにこれとても
安藝か旗本は兄をとはし勇士二三十人竹鎗を
もつてつきかゝりし鉄棒をとりて打かゝる
この乱軍の中に是入道七八疋大小猿二三百疋
捕られて目も当られぬふみなれは今も其類に對
して兵軍なる無用なりしと禪を鳴して
山下の陣へ引つける今日討死し是入道の

容體を改らるゝ趣々の毛漆のことくにてかゝりける
車汁のことく鉄を打小ふりにしてことく切てをも
されとも少しもやらぬ志しあかりし年とへし
猿といふよりける物を日もし茶湯なれは今日に征伐
を延引し明日まて朝より山林へ火をかけて
一時に其類を滅亡させるへしとてこのめし
上下皆陣にあつまりて酒宴をしてうたひまふ
まふ人あり陣のうちをとりて謡をうたひし
舞ふもあり酒の酔に若なからて物をもてて
沐息しかりけるにまして志かも此夜三更後

ふかき志の程つくづくと浮田が四方の輩もきく
けるまいつの程より黒入道数十疋数万の猿と
引率して山より山にちかく本陣へおしよせ
きたりあるるに幸つつみ殺し引うち殺せし。
本陣よりもこひけるに砕けよ上下のもせん
つきなく武具も馬具もなく打みて営とも
志あれども逃もせざりけると幸黒入道大猿小猿
一人に七八疋づつ抓付て噛めぐる大将安藝
もかしき命を助りて主従わづかに六十人
ばかりからやうやうと落延ける夜明る頃ぞ本宇

死生の軍卒四五百人主人のあとを追て逃
来まり武士雑卒もかずかず千人あまり今
夜の夜討に命死せしが今は安藝が一家の
人数ともちりぢり退治なりしかば今は郡郷と
ちかく本城へ注進しもやく征伐の軍勢は
むかふべしとぞきこえける。

最上英雄録巻五終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan